

Title	韓国における漢字使用の現状と展望に対する一論考： 若者の語りから対漢字意識を読み解く
Sub Title	Use of Chinese characters (Hanja) in South Korea : a focus on reports from the young generation
Author	吉岡, 知輝(Yoshioka, Tomoki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.99 (2025.) ,p.[69]- 92
JaLC DOI	
Abstract	This study examines how young people in South Korea perceive, use, learn, or reject Hanja, the Chinese characters historically used to write the Korean language. It also explores the evolving roles of Hanja in contemporary Korean society. While previous studies have largely focused on language policies such as “Hangul-Exclusivity” which promotes the exclusive use of the Korean script Hangul, this study emphasizes the importance of considering public opinion, particularly that of the younger generation. Although the Hangul-Exclusivity policy has significantly influenced various aspects of Korean society, including education, its sociocultural implications require further exploration from the perspective of ordinary citizens. To understand the current status of Hanja in South Korea, this study adopts a cultural and anthropological approach, including fieldwork and in-depth interviews. Findings reveal that although the visible use of Hanja has declined, many South Koreans, especially younger ones, recognize its value in promoting a deeper understanding of the Korean language. In addition, the roles of Hanja appear to be shifting: it increasingly functions as a symbolic, aesthetic, and design-related element in modern Korean culture.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000099-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

韓国における漢字使用の現状と展望に対する一論考

—若者の語りから対漢字意識を読み解く—

Use of Chinese Characters (*Hanja*) in South Korea: A Focus on Reports from the Young Generation

吉 岡 知 輝*

Tomoki Yoshioka

This study examines how young people in South Korea perceive, use, learn, or reject *Hanja*, the Chinese characters historically used to write the Korean language. It also explores the evolving roles of *Hanja* in contemporary Korean society. While previous studies have largely focused on language policies such as “Hangul-Exclusivity” which promotes the exclusive use of the Korean script Hangul, this study emphasizes the importance of considering public opinion, particularly that of the younger generation. Although the Hangul-Exclusivity policy has significantly influenced various aspects of Korean society, including education, its sociocultural implications require further exploration from the perspective of ordinary citizens. To understand the current status of *Hanja* in South Korea, this study adopts a cultural and anthropological approach, including fieldwork and in-depth interviews. Findings reveal that although the visible use of *Hanja* has declined, many South Koreans, especially younger ones, recognize its value in promoting a deeper understanding of the Korean language. In addition, the roles of *Hanja* appear to be shifting: it increasingly functions as a symbolic, aesthetic, and design-related element in modern Korean culture.

Key words : South Korea, Chinese-character cultural sphere, Language policy for Hangul-Exclusivity, Othering of *Hanja*, Changing roles of *Hanja* in Korea

キーワード：韓国、漢字文化圏、「ハングル専用」言語政策、漢字の他者化、韓国漢字の役割変化

1. はじめに

韓国語という言葉あるいは韓国における言語使用を考える時、一般的には表音文字「ハングル」の印象が圧倒的に強いのではないだろうか。現代韓国社会の言語使用における文字表記は大多数がハングルによって行われている。他方、歴史を振り返ってみれば、韓国・朝鮮半島が日本や中国、台湾、越南と同じく漢字文化圏に属していることもまた事実である¹⁾。

しかしながら、現代韓国の状況はどうであろうか？「漢字文化圏に属してきた」という歴史を感じさ

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻後期博士課程1年



図 1. 1973 年 3 月 1 日付 (左) と 2023 年 3 月 1 日付の『朝鮮日報 (조선일보)』1 面²⁾

せないほど漢字表記を目にする機会が減少している。漢字表記の存在感も薄くなったと言えるだろう。言い換えれば、漢字という伝統的文化要素の位置づけは社会的に大きな変化を経験してきたと考えられる。

そこで、本論文では現代韓国社会を生きこれからの韓国社会を担っていく若者世代に着目する³⁾。その上で、フィールドワークを通して漢字に関する様々な語りを拾い上げ、考察を施すことで、「漢字」という文化要素に対する彼らの意識やイメージ、接触経験や付き合い方の実態を明らかにすることを目的とする。

漢字文化圏の一員として現代韓国社会を見つめたときに、そこで漢字という文化要素がどのような役割を与えられ、果たし、人々にどのような意識を向けられ、時にはどのように応用されているのかを「人々の視点」を基軸として動的に明らかにしたい。「韓国政府の言語政策・教育指針」という「上からの」政治史的観点ないし言語学的な切り口だけでは、人々の実際の声や話者意識までは拾えないからである。

分析過程では「生成の語り」「動的な伝統」といった文化人類学的文脈を持ち出しながら、韓国の人々の漢字にまつわる語りと既存研究の通説や知見とを突き合わせ、埋もれていた声がなかったかを吟味し、韓国における漢字の「これから」を展望する上での新しい視角を提供する。ジェイムズ・クリフォード (2003)『文化の窮状』によると、近代の民族誌の語り方は主に 2 つあったという。その 1 つが「生成の語り」である。これは環境変化や時代の変化に合わせて所謂伝統文化が形を変えつつ創造され続ける動態を認め、その変容をただただ嘆くのでは積極的かつ前向きに接する記述態度を指す。他方、伝統文化を「もう変化しないもの」と見なし本質的な世界に閉じ込めその可変性を否定・凍結し、環境変化の中での変容を「失われていく過程・消滅過程」として接する態度が「消滅の語り」である。後の先行研究紹介でも述べる通り、韓国における漢字という文化要素に対する眼差しは、いわば「消滅の語り」に終始していた。しかし、それで良いのだろうか。日常生活で目にする場面が極端に減少したとはいえ、「部分的に漢字表記を用いる場面」を無視することなく、新しい役割や応用があれば目を向けるという機転は必要無いだろうか。これは、エリック・ボブズボウム/テレンス・レンジャー (1992)『創られた伝統』が所謂「伝統文化」とされる文物を現在から隔絶された不変の硬直物としてではなく環境変化や近現代的力学の中で形を変えつつ絶えず再構築されながら存在していくものとして捉えたことに倣う記述態度であり、伝統文化の一角を成す「漢字」という文化要素の位相や人々の与えた意味付

けを動的に把握することになる。韓国における漢字という文化要素を、先述の『創られた伝統』⁴⁾等における示唆を踏まえた文脈に乗せ、変化し続ける「動的な伝統」と捉え直し、人々の語りに立脚しつつ「消滅の語り」ではなく「生成の語り」で描き直すことも志向していく。人々の多様な語りを紹介することで視点の欠如や限界点を補い、「漢字廃止の韓国」⁵⁾といった単純化言説に警鐘を鳴らし亀裂を入れ、これからの文化人類学的な漢字研究の道筋をつけたい。「実際の声」「実際の姿」を一次資料として使えるのは文化人類学の強みであるので、その視点を導入し活かすことに最大の研究意義がある。

2. 既存研究とその限界

韓国における漢字使用に関する先行研究はいくつか存在するが、総じて、「韓国語という言葉にとって漢字はどのような役割を果たすか」といった言語学的視点、ないしは「韓国政府の言語政策において漢字はどのように扱われてきたか」といった政治史的視点に極端に偏っており、人々の実際の声に立脚して話者意識や人々の思いやイメージを拾い上げるという切り口はほとんど見られない。また、言語政策の制度的な側面における政府の方向付けに注目するあまり、現代韓国社会でも続く部分的な漢字表記の利用や新しい応用例に対する着目も総じて乏しい。

例えば生越直樹（2005）は『漢字圏の近代』という書籍の一章を費やし、朝鮮半島における文字使用の変遷を追い、漢字使用に対する賛成派・反対派双方の言い分を紹介したが、韓国語母語話者の意識などには触れずに終わっている⁶⁾。

さらに、宋永彬（송영빈／ソン・ヨンビン）（2004）は『朝倉漢字講座』の第5巻で韓国における漢字史のみならず現代韓国社会に目を向け、漢字教育に対する賛成・反対の議論や新聞記事における漢字表記の割合変化⁷⁾について示しており、新しい示唆は多かった。反面、やはり韓国政府が「ハングル専用・漢字表記不使用」の方向付けをした言語政策ばかりに注目しその効果を社会の中から見出すというスタンスになっている。人々の「実際の声」や「意識」を通り越して「言語政策」と「社会現象」を直結させている点は視点不足と言わざるを得ない。「漢字表記を用いないハングル専用は合理的だ⁸⁾」という私見も記されていたが、その私見を支えるような社会現象ばかり取り上げて、部分的な漢字表記の残存や新たな応用があることに対しては目が届いていなかった。これでは文化人類学的には単なる「消滅の語り」になってしまう。言語政策やその下にある教育指針で「ハングル専用・漢字表記不使用」の方向付けが徹底されているのは紛れもない事実だが、一方現代韓国社会で漢字表記を目にする機会も皆無ではない。この乖離を見落とすのは早計であろう。言語政策といった制度的側面における漢字の扱いばかりを見て「消滅の語り」をするのではなく、部分的な漢字表記の残存や新たな応用例を積極的に取扱い、その役割変化を動的に描く「生成の語り」を心掛けるべきではないか。

この他に、日本語のものとしては李善英（2020）の『朝鮮半島における言語政策の展開』における論考、韓国語文献としては韓国語文教育研究會（2005）による『漢字교육과 漢字政策에 대한 研究（漢字教育と漢字政策についての研究）』なども先行研究として特筆できるが、確認する限り韓国を生きる人々の漢字に関する語りは反映されていなかった。

こうした先行研究の限界を補い超克するために、本稿では「実際の声」「実際の姿」を一次資料として使える文化人類学の強みを活かしながら漢字に関する人々の多様な語りを拾い上げ提示し、考察を施す必要がある。その上で、現代韓国社会において変化する漢字の社会的役割や位置付けの動態を、人々

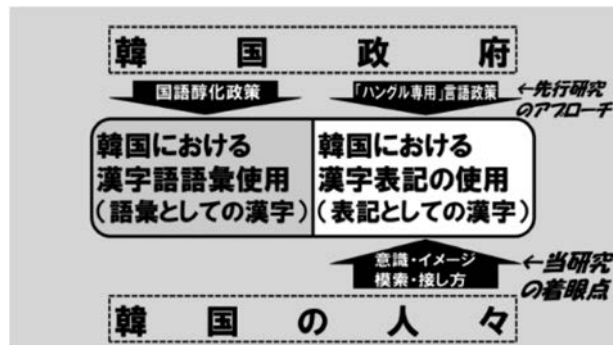


図 2. 韓国における広義の「漢字」に対する韓国政府の対応と当研究の着眼点 (筆者作成)

の模索の中から見出していく必要もある。

3. 韓国漢字史と現況の整理

本節では、当論文全体で前提知識として重要になる韓国・朝鮮半島における漢字史の概略を時系列的に整理した上で、現代韓国社会の状況を紹介する。

3.1. 韓国・朝鮮半島における漢字の通史

朝鮮半島に漢字が伝来した時期について定説はない⁹⁾が、中国とさかんに交流した高句麗が紀元前1世紀には接触していた可能性が高い¹⁰⁾とされる。いずれにしても、3世紀から4・5世紀にかけて、高句麗・百済・新羅の三国で漢字が用いられ始めていたことは確実なようである。それから1443年に世宗大王(세종대왕)が『訓民正音(훈민정음)』を頒布しハングルが創製され世に広まるまで、朝鮮半島内では漢字・漢文中心の言語生活¹¹⁾が営まれていた¹²⁾。表音文字であるハングルが創製され世に広まると現実世界の話し言葉の音をそのまま正確に書き表せるようになったが、19世紀末までハングルは「諺文」と呼ばれる俗語であり、漢字の素養が無い女性や下層階級が使う文字とされていた¹³⁾ため、引き続き漢字漢文はハングルよりも高い地位を保っていた¹⁴⁾という。その後朝鮮王朝時代末期(韓末)には、高宗(고종)の治世で国の公式的な公用文字として認められたり、漢字ハングル混用文の新聞が刊行されるといった出来事があり、ハングルは社会的地位の向上を経験した。文法学者の周時經(주시경/チュ・シギョン)が『大韓国語文法(대한국어문법)』の中で初めて理論・理念としての「ハングル専用」を提唱し漢字を「外来の文字」と位置づけ、漢字が難解である点を憂慮しハングルのみで文章を書く「ハングル専用」を呼びかけたのもこの時期だった¹⁵⁾。続く日本統治時代には、朝鮮語使用への苛烈な圧力など「同化政策」が展開される中でハングルに対する関心と注目度が高まり、周時經の立ち上げた朝鮮語学会などがハングルに対する研究の充実を急いだ。むしろ、朝鮮半島に漢字そのものが持ち込まれたことと日本の植民地支配は関係ないが、「他者からの侵犯」を受ける中で反動・裏返しとして「自らの固有の文化・文字」への関心が高まり独自性への注目と強調が行われたのではないだろうか。

日本の植民地支配が終わると、韓末から日本統治時代にハングルの地位向上を後押ししていた学者・有識者らの活動が導火線となり、彼らが強い影響力を行使する形で米軍政期そして1948年の大韓民国建国後の「ハングル専用」言語政策の素地が作られた。1948年に韓国初代大統領となった李承晩(이승만)

만/イ・スンマン)は「ハングル専用に関する法律(한글전용에 관한 법률)」所謂「ハングル専用法」を公布・施行し、公用文書における漢字表記を制限することで、初めて制度的に「ハングル専用・漢字表記追放」の方向付けを明文化し示した。これは現代に至るまでの言語政策における「ハングル専用」方向付けの出発点となった。続く朴正熙(박정희/パク・チョンヒ)政権期でもその方向付けは維持され、むしろ強化された。李承晩期に曖昧に終わった教育分野での「ハングル専用」に力が注がれ、当時初等学校において実施されていた常用漢字の学習や中学校・高校における国語教育内での漢字漢文学習は1970年3月を境に禁止され姿を消し、初等学校・中学校・高校の国語教科書から漢字表記が消えた¹⁶⁾のである。その後、1972年に中学校・高校のカリキュラムに「漢文」という独立科目が設定され、その範囲内で漢字漢文を学ぶ余地が保たれたが、漢字は「ウリ・マル(우리 말=私たちの言葉)」を学ぶ「国語」から切り離され、蚊帳の外に置かれるようになったのである。言語政策・教育指針における「漢字の他者化」と言える。これは、現在の韓国における公教育カリキュラムの仕組みにも基本的に継承されていると解される。ただ一方で、李承晩政権期の「ハングル専用法」があくまで公用文書における漢字表記の制限に徹し、社会生活の中で人々が漢字表記を続けることを制限したり漢字表記をした者を罰したりする規定が無かった点、続く朴正熙時代の実際的な社会の状況や人々の反応が、言語政策に込めた政権の熱量とは裏腹に必ずしも政府の方向付けと一致していたわけではなかった点も興味深い。李承晩政権期の「ハングル専用法」の射程に民衆の生活世界が含まれていなかったせいか、生活者の視点に立てば同法は「目標宣言」の域を出なかった¹⁷⁾とも言われる。朴正熙肝いりの「ハングル専用促進の7項目」にはメディアや出版業界にも「ハングル専用・漢字表記不使用」を奨励する項目があったが所詮「奨励」の域を出なかったためか、当時の多くの出版物や放送局の文字使用には漢字表記がふんだんに残存し¹⁸⁾、韓国社会の隅々から漢字表記を無くすには至らなかった。むろん、教育現場における漢字学習機会の急減を受けて人々の漢字理解度が下がるにつれ、社会における漢字使用が徐々に減って現在に至るという経緯は無視できないが、言語政策の断行と社会の現実との乖離や時差があったことは想像に難くない。李承晩政権期を経て朴正熙政権期に確立された公教育における漢字の位置づけと、社会生活における漢字表記に対する規制の不在は、些細な変化を経つつも現代に至るまで変わっていない。

では、翻って現代韓国社会における漢字をめぐる状況に目を向けてみよう。「社会でどれぐらい漢字表記が用いられているのか」を定量的に示すことは難しいが、1つの目安として新聞紙面における漢字表記のあり方は参考になる。ここで、韓国内で発行部数の多い『朝鮮日報(조선일보)』『東亜日報(동아일보)』の紙面におけるハングル表記と漢字表記の割合変化を示した宋永彬(2004)の分析を紹介したい。

特に記事本文に関しては、著しい漢字表記の減少が見られる。この傾向は現在もおおむね維持されると言えるし、現代韓国社会全体における傾向にも通底している。一般向けの雑誌など人々の文字生活の大部分はハングルによって行われていると言って良い。これはやはり1970年代の朴正熙がもたらした教育の変化の影響が大きいのではないだろうか。現代の教育現場においても、少なくとも公教育の現場で国語教育の一環として統一的・一律的に漢字を学ぶ機会を用意されていない。1992年から施行された「第六次教育課程」においては、初等学校(国民学校)における各学校の裁量時間内に漢字学習を取り扱う余地を設け、現在は「創意的体験活動(창의적 체험활동)」という科目名で運用されている¹⁹⁾。同じく1992年施行の第六次教育課程で、1972年から国語教育と切り離される形で行われていた中学校・高校の「漢文」科目が必須科目から選択科目となり、各自治体ないしは各学校の選択によって実施有無

表 1-1 新聞の見出しにおけるハングルと漢字の表記率の変化 (%)

	1948年	1958年	1968年	1978年	1988年	1996年	2003年
ハングル率	13.1	27.4	46.1	57.3	75.8	90.8	92.2
漢字率	86.9	72.6	53.9	42.7	24.2	9.2	7.8

表 1-2 新聞記事本文におけるハングルと漢字の表記率の変化 (%)

	1948年	1958年	1968年	1978年	1988年	1996年	2003年
ハングル率	68.4	63.7	81.9	95.6	96.2	97.9	98.4
漢字率	31.6	36.3	18.1	4.4	3.8	2.1	1.6

出典：宋永彬「韓国の漢字」『朝倉漢字講座 5 漢字の未来』朝倉書店、2004 年 143 頁。

が決まるようになった。実質的な降格であろう。そのため、中学校・高校でも漢字漢文を学ばないケースも出てきたと言える。韓国版センター試験（共通テスト）と言われている「大学修学能力試験」において、漢字漢文科目の設定自体はあるが、「第二外国語領域」の選択科目に過ぎず、選択する受験生は限られている。例えば 2023 年 11 月実施の大学修学能力試験で「漢文」科目を選択した受験生は 9,983 名で、総受験者数 444,870 名の 2.24% に過ぎなかった²⁰⁾。

「ハングル専用」言語政策は直接的に韓国社会の漢字表記を制限し瞬間的に状況を変えたわけではないが、教育を介して漢字表記に対する理解度の全体的低下と個人差をもたらした。ただ、だからといって現代韓国社会において漢字表記を目にする機会が皆無かと言えば、決してそうではない。現代韓国社会において漢字表記を用いる場面を積極的にピックアップしてみたい。

例えば、新聞記事の見出しや、ニュース番組の字幕において国名を「韓 日 美 中 英 北」と記載したり、人名だけを漢字で表記したり、「軍 (=軍)」「興 (=与党)」「野 (=野党)」「青 (=青瓦台)」「檢 (=檢察)」といった諸機関の略称、抽象的・難解な概念を漢字表記で示す場合がある。あくまで一例ではあるが、以下のような例がある。

- ・ 맛있는 食文化, 유네스코 마음을 훔치다 (朝鮮日報 2013.12.6)
- ・ 親朴 "정치적 투쟁 예고 ... 큰 파문 일 것" '박前대통령 출당'엔 해석 갈려 (朝鮮日報 2017.10.17)
- ・ 軍・국정원 공무원 첩보 삭제, 그날 靑 심야회의 무슨 일이 (朝鮮日報 2022.7.8)
- ・ 靑경제안보대화 신설靑-韓美日 첫 포괄적 성명 (朝鮮日報 2022.11.14)
- ・ 興 "北이 주권침해" ... 野 "尹, 안보참사도 文정부 탓하나 (朝鮮日報 2022.12.28)
- ・ 민주 "장외투쟁" ... 檢, 곧 영장청구 (朝鮮日報 2023.1.30)

また、商品名のロゴを漢字表記したり、デザインの中に漢字表記を盛り込んだりする事例も珍しくない。例えば、韓国焼酎のジンロを「眞露 (진로)」, インスタントラーメンの辛ラーメンを「辛 (신) 라면」, オリオンチョコパイ・ジョンという菓子名を「情 (정) 초코파이」と表記するなど、韓国社会で広く消費されて「どこにでも売っている商品」として人々に馴染みがあるであろう商品のデザインに漢



図 3. 現代韓国のニュース字幕における漢字表記。

出典：https://youtu.be/bmL0oteV0x0?si=ytdbw_RKSUaMmuN4（最終閲覧 2024 年 11 月 29 日）

図 4. 現代韓国における新聞の紙面。『東亜日報（동아일보）』2024 年 1 月 13 日付²¹⁾。

字表記が盛り込まれていることがある。さらに、最新の K-POP アイドルの CD タイトルに漢字表記が盛り込まれていたり、若者がよく目にする Instagram の投稿や YouTube の動画字幕から広告、飲食店の看板、オーダーメイドの記念日ケーキデザイン、高速列車のロゴマーク、冠婚葬祭の場面、住民登録証の漢字併記、学术论文に至るまで漢字表記を目にする事例はある。また、漢字文化圏からの訪韓客への便宜を図るため、道路標識や駅などの案内表示を「ハングル、英語、韓国式漢字」の三種で行う事例もある。ハングルと英語に日本語や中国語を併記するのではなく、韓国式漢字をハングルに添えることで、「折衷の共通言語」として韓国の漢字を扱い案内表示に役立てるという機転である。これは、「伝統文化継承と国際交流のために漢字が必要である²²⁾」とした上で道路標識への漢字表記併記を積極推進しようとした金大中（김대중）政権も提唱していた工夫²³⁾ だった。

3.2. 小括

総じて、韓国における言語政策とその下にある教育指針という文脈においては現代に至るまで「ハングル専用・漢字表記不使用」のベクトルが強く維持されてきた。と同時に、だからといって現代韓国社会に漢字表記が皆無でないという点にも強く留意すべきであり、言語政策と教育指針における制度的な方向付けを知るだけで、韓国漢字史や現状の全てを説明しきることはできないのだ。だからこそ、今を生きる人々の漢字をめぐる語りや振る舞いから韓国における「漢字」のあり方を探るアプローチが待たれているのではないかと。

4. 現地調査の実施に際して

4.1. 現地調査の実施概要

前節までで、韓国・朝鮮半島における漢字をめぐる歴史的背景と多方面での現状に関して、様々な具体例を示しながら紹介し分析した。本章では、その内容を念頭に置きつつ人々の話者意識を補う目的で行ったフィールドワークについて述べる。当該調査は、2023 年の 8 月、9 月、11 月に断続的に実施され、基本は対面式、場合によってはオンライン形式で実施した。調査対象は韓国社会の将来を担うであろう若者を対象としたいと考え、インフォーマントの属性を制御する目的もあり韓国の大学・大学院に通う韓国の学生であることを条件として協力者を募った。将来の韓国社会における漢字という文化要素の位置づけ等について、将来予測することは難しい。しかし、これから社会に出て 20 年後、30 年後の韓国社会を作っていく彼らの漢字に対する考え方を今の内に知っておくことは、将来展望の描き出しに有益であると判断し、大学生世代を対象を絞ることに一定の意義があると考えた。また、サーベイ調査ではなく文化人類学的な「語り」の収集を方法として選択した背景には、今回の研究調査を文化人類学における「フィールドの入口」と位置づけ、時間をかけてラポールを形成し、人間関係構築の中で本音を聞き出し、参与観察等を交えた今後の継続的・断続的現調査への道筋をつけるという意味があった。「漢字に関する韓国の若者の考え方を探りたい」という当方の希望を明らかにしながら筆者の Instagram での拡散を通して呼びかけを広めた結果、合わせて 19 名の協力者が調査に参加した。なお、協力者達の簡単な属性は以下の通りである。

調査は、対面の場合韓国国内のソウルまたは釜山で行われ、インタビュー調査が主であるが、調査協力者の漢字に対する基本的な意識や考え方および接触経験を確認するために、インタビュー冒頭のウォーミングアップとして設問調査用紙への記入を求めた。質問紙への記入時間とインタビュー時間を合わせた所要時間は 60 分から 90 分程度だった。

質問紙の 1 ページ目では表 2 でまとめたような基本的な属性（性別・年齢・所属大学・居住地・出身）を確認した上で、漢字への接触経験を尋ねている。こうした基本情報を踏まえつつ、後にインタビュー調査を進めていくことになる。

質問紙の 2 ページ目においては、漢字に関する様々な言説 22 項目を短文で提示し、それぞれの言説に対してどの程度同意できるかをリッカート 5 点尺度（とても同意する、ある程度同意する、微妙だ、あまり同意しない、全く同意しない）で直観的に選択してもらった。これは記入した回答を対話の入口として、漢字に関する語りを引き出すきっかけにするために実施したものであり、統計的な処理を目的としたものではない。ただ、協力者全体の全体的な傾向を把握するために、全 22 の各項目に対する回答状況を点数化して、19 名の平均点を算出した。22 の質問項目とともにその結果を表 3 に併載したので、参照されたい。具体的には「とても同意する」に 5 点、「ある程度同意する」に 4 点、「微妙だ」に 3 点、「あまり同意しない」に 2 点、「全く同意しない」に 1 点を与え、19 名の平均点を算出している。この値が 5 に近ければ近いほど、その言説に対するインフォーマント達の同意度合いが高いということになる。

また、同じく質問紙の 2 ページの設問 11 においては、差し支えない範囲で各協力者の氏名を漢字で書くように依頼する回答欄を設けている。その下の設問 12 では、韓国社会で極めてよく知られていると思われる商品のうち、デザインに漢字表記が盛り込まれているものを事例として取り上げ、まずその

表2 フィールドワーク調査協力者の属性等

	性別	年齢	通学先	専攻	居住	出身	漢字 関連 資格 有無	日本語 学習経験	中国語 学習経験
A	女	22	市内私大	文化人類学	ソウル	慶南	○	○	○
B	女	21	市内私大	演劇・音楽	京畿	京畿	×	○	○
C	男	23	市内私大	社会学・教育学	ソウル	ソウル	○	×	○
D	女	21	市内私大	経済学	ソウル	全北	○	○	○
E	男	22	市内私大	文化人類学	ソウル	ソウル	×	○	×
F	女	21	釜山市内私大	経営学	釜山	釜山	○	○	×
G	女	23	市内私大	統計学	ソウル	ソウル	×	○	×
H	男	23	市内私大	経営学	ソウル	釜山	○	○	○
I	女	21	市内私大	日語日文	京畿	全北	○	○	○
J	女	20	進学編入準備	経営学	慶南	慶南	×	○	×
K	男	21	市内私大	経済学	ソウル	ソウル	×	○	○
L	女	24	市内国立大	スペイン文学	ソウル	ソウル	×	×	○
M	男	23	市内国立大	文化人類学	ソウル	大田	○	○	○
N	女	23	市内国立大	文化人類学	ソウル	ソウル	○	○	○
O	女	21	地方国立大	日語日文	慶北	慶北	○	○	○
P	女	21	地方国立大	日語日文	慶北	慶北	×	○	×
Q	女	22	地方国立大	日語日文	慶北	慶北	×	○	○
R	男	19	地方国立大	政治学	慶北	慶北	○	○	×
S	女	23	市内私大	仏文学	ソウル	ソウル	×	×	○

※特筆が無い限り、「市内私大」「市内国立大」はソウル市内のことを指す。慶南は慶尚南道、慶北は慶尚北道、全北は全羅北道、京畿は京畿道の略称である。釜山と大田は広域市。フィールドワーク時の質問紙記入結果より筆者作成。

表 3 漢字に関する様々な言説に関する 5 点尺度の設問内容と 19 名の平均同意度

	19名の平均値 (平均同意度合い、5点満点中)
①漢字は面白く興味深い	3.3
②漢字は難しいものだ	4.3
③漢字は昔の文字だ	3.3
④漢字は古臭い	2.6
⑤漢字には高級感がある	3.2
⑥漢字はお洒落だ	3.6
⑦漢字は韓国文化の1つである	4.1
⑧漢字は韓国の伝統文化の1つである	4
⑨ハングルは韓国文化の1つである	4.8
⑩ハングルは韓国の伝統文化の1つである	4.8
⑪漢字は日本文化の1つである	4.4
⑫漢字は日本の伝統文化の1つである	4.3
⑬漢字は中国文化の1つである	4.7
⑭漢字は中国の伝統文化の1つである	4.6
⑮漢字は東アジア(全体)の文化である	4.7
⑯漢字は東アジア(全体)の伝統文化である	4.5
⑰漢字学習は重要だ	4.6
⑱漢字を読めることは必要だ	4.3
⑲漢字を書けることは必要だ	3.6
⑳漢字教育の実施は必要だ	4.2
㉑将来子供が生まれたら漢字を含む名前を付けたい	3.3
㉒生活の中で触れる漢字語それぞれが具体的にどのような漢字で構成されているか把握している	3.4

設問調査の質問紙を参考に筆者作成

漢字表記を活字で示して読解可否を確認した。次に質問紙の 3 ページの設問 13 で同じ商品のデザインにおける漢字を商品画像の中で提示し、改めて読解可否を確認する質問も設けた。商品デザインから抜粋した漢字表記を活字で提示する段階においては、商品画像は見えないように隠している。

実際のインタビューは、こうした質問項目への回答状況を踏まえてその内容を出発点とし、さらに対話の中で掘り下げていく形で行った。例えば、漢字接触経験に関する設問への回答を踏まえながら、詳

12. 以下の漢字の読み方をハングルでお答えください。

情 男 辛 純
 眞露

13. 以下の商品デザインに含まれる漢字の読み方をハングルでお答えください。



図 5. 質問紙における商品デザインの漢字表記をめぐる理解度調査

※設問 12 が終わるまで、設問 13 は見えないようになっている。質問紙より筆者抜粋。

細なエピソードを聞き出したり、2 ページ目の漢字関連言説への同意度に対する回答を振り返りながらその選択の理由や背景を聴取したりすることで、漢字に対する意識や想いの語りを引き出そうとした。また、インタビュー終盤では「デザインの中における漢字表記の利活用」という観点から一消費者としての印象や考え方を聴取した。このように、漢字という文化要素との接触経験、基本的な考えなどを質問紙に記入してもらい、その中身を糸口として漢字に関するエピソードや想い、イメージなどをさらに掘り下げて聴取し語ってもらう流れで各人に対する調査を進めた。

4.2. 研究倫理について

当研究は慶應義塾研究倫理要綱を遵守し、指導教員の指導を十分に受けながら計画し実施した。調査協力者には予め研究目的を明らかにし、収集する情報の範囲、公開する情報の範囲などについて事細かに説明し、論文内では個人を特定できる形で言及しないことを丁寧に伝えた。十分な理解と納得を得てから調査を遂行するために、当研究では書面（研究調査参与同意書）への署名をお願いし、調査目的や内容について不安や希望があればいつでも申し出るように促した。

5. 現地調査の結果報告と分析・総括

本節では、以下インタビュー前の設問調査で得られた結果の報告も織り交ぜながら、それぞれのトピックに関連して対話の中で聴取できた人々の語りを紹介し、一般化の難しさを自覚し認めた上で、考察を施していきたい。ここで拾い上げた数々の語りに「韓国の人々の漢字に対する意識」を代表する力はないが、代表性の欠如を認めた上で、先行研究や文献調査の知見からは導けない・説明しきれなかった意見の存在を示すことは可能と考えた。

5.1. 漢字接触経験から読み解く私教育・文化資本との関連性

幼少期であれ高等教育であれ、何らかの形で学修活動を通し漢字に接触した経験は漢字に対する本人の考え方に無視できない影響をもたらすものと考えられるが、同時にそのエピソードのあり方から韓国社会における漢字という文化要素の位置づけや人々の付き合い方を知ることでもできるだろう。語りを分析する前提知識として、各調査協力者の漢字接触経験を次のように図表化した。ここで言う「漢字接

表 4 各調査協力者の学修を通じた漢字接触経験 一覧表

	初等学校時代			中学校時代			高校時代			大学時代		
	学校	塾・学外	家庭	学校	塾・学外	家庭	学校	塾・学外	家庭	大学内	学外	独学
A	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
B	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
C	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
D	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
E	○	×	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×
F	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
G	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
H	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×	×	×
I	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
J	×	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×
K	×	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×
L	○	×	○	○	×	×	×	×	×	○	×	×
M	×	○	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×
N	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
O	○	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	○
P	×	○	○	○	×	○	○	×	×	×	×	×
Q	○	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×
R	○	○	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×
S	○	○	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×

フィールドワーク時の質問紙記入結果より筆者作成。

触」とは机上の勉強のみならず教育漫画・動画コンテンツ利用も含めた広義の学修活動におけるものを含意する。

上記の表 4 から分かるように、漢字に接触した時期や場所を分析すると、初等学校に通っていた比較的幼少期に、学校教育のみならず、家庭や校外教育つまり私教育の領域で漢字に接触している場合が多いことが分かる。各人が語りの中で明かしたエピソードからもその傾向は裏付けられた。多くの調査協力者の発話内容によると、「両親の教育」の影響により学校での漢字教育実施有無とは関係なく漢字学修に触れる機会を与えられていたようである。詳しい実態を、調査協力者の語りから読み解いてみたい。

(語り 1)

筆者：初等学校で漢字漢文の授業があったみたいですが、漢字に初めて触れたのはその時ですか？

B：いいえ、それに先立って幼いころから母が子供向け漢字テキストを買い与えてくれて、家で触れていました。最初は好奇心で楽しめたけど、だんだん難しく感じるようになっていったなあ。でもそのおかげで初等学校の漢字授業は簡単すぎるくらいでした、友達は退屈そうだったけど。

初等学校で漢字の授業は設けられていなかった協力者 A も、幼稚園時代に漢字に触れる機会があったと振り返りながら次のように述べた。

(語り 2)

A：初等学校で漢字の授業は無かったんですが、初等学校に通うのに先立ってすでに接していて…。よく覚えていないけど幼稚園で漢字を書いてみるような創作活動があつて、何となく興味を持っていて、漢字の絵本くらいは買い与えてもらって家でも読んでいたような気がします。その時に漢字を覚えて身に付けたっていうわけではないけど、体験活動という意味ではそういう経験もありました。

以下の協力者 C の語りに見られるように、両親が漢字（表記）を身に付けることの重要性を強調し、個人的に参考書を買って与えたり、直々に指導したり、漢字塾に通わせたり、資格試験を受けさせたりするケースも散見された。

(語り 3)

筆者：初等学校では漢字漢文の授業は無かったんですね。

C：そうです。でも、漢字に関しては、最初は母に参考書を買って与えられて半ば強制的に勉強して、後々漢字の塾に通うようになりました。後に漢字検定試験も受けました。

筆者：なぜお母様は漢字（そのもの）を勉強しろとおっしゃったんでしょうか？

C：将来的な読解力、語彙力というか言葉を理解するために絶対必要だという感じでしたね。漢字語の語彙がたくさんあるけど、その語彙だけを音と意味でただ覚えるんじゃなくて、どんな漢字でできているか分かってこそ理解力が高まるって。当時は大変だったけど、今は私もそう思います。例えば漢字表記を知らずに四字熟語の音と意味だけを結び付けて覚えるの、大変でしょう。「십중팔구 (十中八九)」とか。

先行研究では、「ハングル専用」言語政策とその下にある教育指針の中での漢字教育冷遇ばかりに焦点を当てていたため、公教育しか射程に含めることができておらず、あたかも公教育だけが教育の全てであるかのような扱いだった。誰でも平等に接する機会が用意されている初・中・高等教育機関における漢字教育の実施有無が人々の漢字の理解度を左右すると語られていた。だからこそ、「学校で漢字教育の機会が減ることで、人々の漢字理解度が下がる」という論法が取られていたのだろう。しかし、私教育つまり各個人・各家庭で施す教育における漢字接触の機会が多かったとするならば、言語政策や教育指針の文脈からは説明できない人々の漢字への向き合い方があるのではないだろうか。両親や周囲の

大人が「漢字を学ぶことの意義」例えば言葉を語源から・根底から根本的に理解することの意義を理解していたり、校外教育で漢字の学修機会を与える余裕があることが本人の漢字観形成に作用する可能性があると考ええる。今回の調査協力者は皆比較的漢字に対して肯定的な眼差しを向けて語りを繰り返す傾向が強かった。それは一種のバイアスであり当研究の限界でもあるのだが、多くのインフォーマントが口を揃えて幼少期における家庭での漢字接触に関するエピソードを口にしたことと彼らの漢字観は無関係ではないと考察できる。幼少期を含めて、家庭や漢字塾・学習教室などで子どもが漢字を学ぶ機会を得た背景には、親や親が用意した環境が強く関係しているだろう。例えば、私教育が義務的なものでない以上は、親が「漢字に触れ、学ぶ必要性」を理解し多少なりとも子供に働きかけや動機付けをしなければいけない。そうした熱心さに加えて、漢字に関する絵本や学習漫画、書籍を買い与えたり場合によっては習い事として漢字を勉強させるための金銭が必要である。そう考えると、ブルデュー（1990）『ディスタンクシオン』の中で提示されたような「文化資本」との関係性が強く表れる領域なのではないか。特に受験に直結しない私教育領域で漢字に触れる機会を持つためには、一定の文化資本が必要なのだろう。

ただし、以下のやり取りが間接的に示唆している通り、文化資本に恵まれていたからといって、必ずしも漢字の学びに資本を振り向けるとは断言できない点には留意すべきであろう。幼少期の私教育を充実させる経済力や時間的余裕があったとしても、それはあくまで「素地」であり最終的には親の働きかけや動機付けが決定打となることが多いようだ。

（語り 4）

D 漢字に限らず、母がすごく教育熱心だったの。だからその流れで漢字に英語にピアノに、幼少期はすごく忙しかった。

筆者：例えば漢字を勉強する時間があつたらもっと英語に時間を使いなさい、とかは言わなかった？

D：私の場合はそんなことなくて「漢字も、英語も」って感じでした。でも似たような（環境の）周りの子には、そうでない子もいたと思う。毎日ピアノ教室だけに通ったり、フィギュアスケートに集中したりね。

総じて「公教育」のみならず、むしろ「私教育」領域、特に受験勉強・進路実現を直接の目的としない習い事等における教育環境、周囲の動機付けは大きな影響を持つ。しかし、私教育において漢字に触れさせることができる「前提としての文化資本」があっても、その上で両親などの漢字観つまり漢字を学ぶことに対する積極的な態度や必要性の認識が伴わないと金銭や時間が漢字の学び以外に振り向けられてしまう可能性もあると考えられる。換言すると、両親などの漢字に対する態度と文化資本の両者によって子どもの漢字学修経験、漢字観は左右されるようになっている様子が浮き彫りになった。ブルデュー（1990）が示唆したように、一般的に文化資本は世代間再生産されると言われているが、漢字観の場合は文化資本に恵まれていても親の考え次第では子供に継承されない場合もあるだろう。文化資本が世代間再生産されたとしても、漢字の知識や漢字観が再生産されるとは限らない。しかしいずれにしても、背景としての文化資本に支えられながら、親の漢字観の影響を受ける中で、漢字の知識はよりプライベートな領域で限られた一部の人々によって世代間再生産されていく傾向が高まっているのではないだろうか。次のような語りも、漢字を学ぶことに対する熱の入れ方が個人間そして家庭間で大きく

異なることを示唆している。

(語り 5)

C: 僕は家庭で祖母から漢字を幼少期に教えてもらっていたりして、難しいなあと思いつつもある程度の知識と興味を持ちながら中学に進学しました。中学から「漢文」科目があつて、学校で初めて漢字の授業を受けましたけど、周りの友達が本当につまらなそうにしている、「漢文」の授業を心の底から嫌がっているのを見てちょっとびっくりしちゃいました。一方で、僕の友達には「漢字オタク」がいますよ。

公教育における漢字学修の機会が減れば減るほど、私教育の担う役割は大きくなる。必ずしも学校で学べない時代だからこそ、漢字を学ぶ重要性を認め、なおかつ子に漢字学修の機会を与えられる余裕がある人々によって漢字観や漢字知識が世代間再生産されていくのではないだろうか。

5.2. 必ずしも漢字を意識の中で「他者化」していない若者

先行研究等で明らかにされた通り、韓国における言語政策やその下にある教育指針においては、「ハングル専用」方向付けにより漢字が「우리 말 (우리 말=私たちの言葉)」の枠外に置かれ、ある意味で「他者化」されていた。つまり우리 말 (우리 말=私たちの言葉) の表記としてハングルの重要視する一方、漢字をその構成要素から除外するような傾向があったのである。では、韓国の将来を担う若者の意識の中ではどうだろうか？

例えば、塾で中高生を対象に国語講師のアルバイトをしている H さんは、次のように語った。

(語り 6)

筆者：グローバル化の時代、漢字を勉強する時間があるなら英語を勉強した方が良いという意見に対してはどう思いますか？

H：事実、自分も英語を使ってインターンに参加しているし英語が大切でないとは言わないけど、まずは「우리 말 (우리 말)」じゃない？

漢字(表記)を知っていてこそ、根底から「우리 말」の語彙を読解できる。だから別に完璧に書ける必要までは無いだろうけど、漢字も「우리 말」の一要素に含まれるだろうし、外国語と同列には扱えない。難しい学術用語をハングルで記してその後に漢字表記ではなく英訳を付すやり方も、個人的にはどうかと思う。英訳するとニュアンスが変わってしまうかもしれないけど、漢字表記を付ければその心配は無いわけだし。その優先順位は履き違えたらいけないと思う。もちろん誰かに強要する気はないけどね。でも、アルバイトで塾での国語の時間には、「国語をできるようになりたければ漢字をしっかりと勉強しなさい」って子どもたちに教えています。漢字表記を意識すれば、「最強(최강)」と「最悪(최악)」など、共通の漢字が入っている語彙をセットで身に付けて知識を繋げられるんだって言います。言葉は約束事です。中学校では、漢文の先生よりもむしろ国語の先生が「漢字をしっかりと勉強しろ」って言っていたけど、その理由が今なら分かります。その影響もあるのかなあ。

表 5 協力者それぞれの漢字氏名書き入れ可否調査結果 一覧

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S
正/誤	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○

フィールドワーク時の質問紙記入結果より筆者作成。

このように、言葉（＝우리 말）を根本的に理解するためには漢字そのものの表記を知っているべきだという意見や、「漢字は韓国文化の中の1つだ」という言説に同意する声が相次いだ一方、「漢字を書けるようになる」必要性については否定的な声が多かった。それに加えて、漢字を意識の中で韓国文化の外に置き「他者化」しているわけではないからといって、漢字の理解度が高いとは限らなかった。

（語り 7）

筆者：漢字も韓国文化の内の1つだという意見には同意されるんですね。

G：はい。もちろん中国が発祥の地ではあるんだけど、史劇を見れば分かるように、韓国の伝統文化の構成要素でもあると思う。でも私自身はそんなに漢字を知っている方ではないですよ。

筆者：漢字を勉強するなら、「読める」レベルまでで大丈夫でしょうか。書ける必要もありますか？

G：実生活を見れば現実的にさすがに書ける必要までは無いかと。見て意味が読み取れれば。

他方、初等学校レベルの簡単な漢字や、自分の名前の漢字を正確に分からないことに対しては、この調査の限りは辛辣な声が多かった。参考までに、各協力者に対して自分の名前を漢字で記入するよう促した時の調査結果を示しておきたい。

今回の調査の限りでは、ほとんどの協力者が自らの名前を漢字で書くことができていたが、時折部首を迷ったり、書いたり消したりを繰り返す者もいた。ただ総じて正答率は高かったものと理解できる。後述の語りは、漢字に対する理解度が高い人が集まっているというバイアスを考慮しながら読み解くべきであろう。

（語り 8）

筆者：「中」とか「生」とか「日」「美」みたいな基本的な漢字を分らない（読めない）人に会ったらどう思う？

D：さすがにそれくらいは読めると思うけど、「이것도 몰라?（これも知らないの?）」って思っちゃうかも。

「漢字は難しい」「漢字の勉強はつまらなかった」「漢字はどうしても우리 말（ウリ・マル＝私たちの言葉）に思えない」と語ったIさんでさえ、次のように語った。

（語り 9）

筆者：自分の名前を漢字で正確に書けない人も多分いますよね。

I: そうかもしれないけど、さすがにそれは無関心すぎると思う。名前の由来が込められているのに。私の場合、初等学校の漢字学習の授業で、「自分の名前の由来を調べて来なさい」という宿題がありましたよ²⁴⁾あと行政手続きで書く欄があったりする場合もあると思う。その時困りそう。

先行研究においては、漢字教育が「国語教育」から切り離されている点などに注目し、韓国における「漢字の他者化」とも呼べる状況について指摘されていた。しかし、人々の意識という文脈においては、漢字表記に対する理解度の高低に関係無く、自文化（韓国文化）の根底に漢字という文化要素が根付いているとの自覚は存在するケースが多かった。本人の漢字理解度とは関係なく、韓国文化から「漢字」という文化要素を切り離して他者化している傾向はあまり見られなかった。制度的・政策的に「他者化」されているからといって、韓国の若い人々が意識の中で必ずしも認識の中でそう線引きしていると断言できるわけではないと小括できる。ただ、彼らの語りからは「韓国語の語彙力、文解力、読解力などいわゆる国語力のために漢字（表記）を学び備えておくこと」と「日常生活での漢字表記拡充」とを線引きする態度もうかがわれた。話の合間で「日常生活で漢字表記が用いられず全ての文字がハングル書かれていてもそれ自体が問題だとは思わないが、韓国語の言葉を構成する漢字を把握しながら漢字の知識を通して意味を解釈する作業をしなくなると語彙力や読解力が貧しくなる」という懸念や嘆きを呈する協力者も散見されたのである。以前のように社会生活に漢字表記が溢れることを期待しているのではなく、それとは別問題として韓国語の読解力や文解力低下を危ぶむ立場から、漢字（表記）を自分事として知っておくべきだと述べていた。表2で提示したように今回のインフォーマントの中には日本語学習経験や中国語学習経験を持つ事例も少なくなかったが、外国語学習上の利点として漢字に関する語りを展開した人はほとんど見られず、全体的に強調されたのは「韓国語」に対する文解力・読解力との関連付けであった。

5.3. 「生成の語り」で捉える「動的な伝統文化」としての漢字表記

前述の通り、質問紙の末尾には商品デザインに盛り込まれた漢字表記に着目した設問が用意されていた。漢字表記が含まれる商品デザインの実例を5つ取り上げ、まずその漢字表記を活字で示し読解可否を確認し、その次に実例を活字ではなく写真で提示し、改めて読解可否を確認した。提示した商品の実例と確認結果は次の表6で示す通りである。

全体的に漢字に対する理解度が高い協力者が多かったため、商品デザインから抜粋した漢字表記だけを活字で提示しても読解できるケースが多かった。ただ、活字で提示された時に読解できなくても、各人が見慣れた商品の画像を提示されたら合点がいくというケースが多かった。一方「活字で理解できていた漢字がデザインの中で示された途端理解できなくなる」という逆の事例は一切見受けられなかった。例えば「チョコパイ情 (초코파이 情)」の「情」という漢字を活字では読めなかった一方、商品画像の中では読めた協力者Lは次のように語った。

(語り 10)

L: この漢字そのものだけを活字で見せられても分かりませんでしたが、この写真でチョコパイの写真を見せてもらえたら分かりますよ。この「情」っていう毛筆風のマークが目飛び込んできて、お店に色々並んでいてもすぐ分かります。受験の時とか、幼いころからずっと食べてきた思い出の

表 6 漢字表記を含む商品デザインにおける漢字に対する読解可否（活字提示時と画像提示時）

	초코파이 情		「男」헛개茶		辛라면		純후추		眞露	
	(チョコパイ情)		(「男」ホッケ茶)		(辛ラーメン)		(純 胡椒)		(眞露 焼酎)	
	活字	画像	活字	画像	活字	画像	活字	画像	活字	画像
A	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×
B	×	○	○	○	○	○	×	×	×	○
C	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
D	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
E	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
F	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
G	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○
H	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
I	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○
J	○	○	×	×	○	○	×	×	×	○
K	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○
L	×	○	○	○	○	○	×	×	○	○
M	×	○	×	○	×	○	○	○	×	×
N	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×
O	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
P	×	○	○	○	○	○	×	○	×	×
Q	○	○	×	×	○	○	×	×	×	○
R	×	○	×	×	○	○	○	○	×	×
S	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○

フィールドワーク時の質問紙記入内容より筆者作成。

お菓子なので、店では真っ先にこれを選びます。



図 6. 化粧品ブランド「ソルファス（설화수）」の新旧デザイン

出典：https://daily.hankooki.com/news/articleView.html?idxno=932391（最終閲覧 2024 年 11 月 29 日）

この語りを逆に捉えたと、当該商品に強い愛着をもつ協力者 L でさえ、「情」という漢字の活字は理解できておらず、彼女にとってデザインの中の「情」という漢字表記はブランド識別のための目印程度の役割しか果たしていなかったようである。他方、「真露（韓国焼酎）」という漢字表記を活字では読めなかった一方、商品画像を通した場合読解できた協力者 J は次のように述べた。

（語り 11）

J: 私はこの画像を見せられて初めてこれが「真露」だと分かりましたけど、別にこの商品画像の中の「真露」という漢字を読んだわけじゃないんです。このブランドのこのデザインを知っているから、既視感があったから分かっただけで、文字情報としては読んでいません。毛筆風の「真露」という漢字表記も含めた全体のデザインを見せてもらえたから、分かったんです。でもとにかく（漢字表記のロゴは）目に付きますね。目に入って来る。

協力者 L の語りであれ、協力者 J の語りであれ、デザインに含まれた漢字表記そのものを文字情報として読んでいるわけではないことは明らかである。視覚的にブランド・商品を認識するための目印・記号²⁵⁾として機能したり、色使いや容器の形と一体となって全体のデザインの中の一構成要素として視覚的に捉えられたりしていることが推察される。

加えて、漢字表記を盛り込んだ商品デザインなどに対する印象の聞き取り調査を行った。一消費者としてそれらに対して抱くイメージのみならず、どのようなシーンでそれらを購入したいかなどを、事例の写真を提示しながら踏み込んで聞き取りを行った。事例としては、次に示す図 6 のように「ソルファス（설화수/雪花秀）」という化粧品の新旧デザインを示した。この化粧品は近年、デザインが大幅に変更されリニューアルを遂げた結果、商品デザインから漢字表記が無くなったことで知られている。この事例に対する印象やイメージ、消費者としての肌感覚や接し方を聴取した。

その結果、ほぼ全ての調査協力者が、漢字表記が盛り込まれたデザインに「高級感」「歴史が長い感じ」がすると語った点が特筆できる。

(語り 12)

筆者：ソルフラス (설화수) という化粧品ブランドのデザインには漢字表記が盛り込まれていたけど、リニューアルで無くなりましたね。漢字表記が有る物と無い物ではイメージに違いがありますか？

A：個人的には前の (漢字がある) デザインの方は、歴史が長そうとか伝統がある感じがして、良い素材 (生薬) が入ってそうな印象を受けます。

他方、化粧品のように商品ごとに対象となる年齢帯がある程度想定されている場合長い歴史や伝統的な雰囲気を感じるデザインだからこそ、若い世代向けではないと感じて遠ざけるような態度を示す発話もあった。長い歴史、伝統というイメージが演出される一方で「若者向けではない」ことの記号にもなり得るのだ。

(語り 13)

G：親にプレゼントするなら、漢字表記の入った「ソルフラス (설화수)」がいいですね。格式がある感じで。アルファベットだけになった新デザインは、なんだか軽いイメージ。でも、元々このブランドは親世代が使うようなブランドだったから、デザイン変更で若い人でも買いやすくなったのかも。友達にプレゼントするなら絶対 (漢字表記の無い) 新デザインです。

いずれにしても、少なくとも消費者の立場から見ると、現代韓国社会でも目にする広告や商品デザインにおける漢字表記が、「記号化・ファッション化・デザイン要素化」としての機能を帯び、演出戦略の担い手になりつつあるという推察は概ね間違っていないだろう。

デザインの中に盛り込まれている漢字表記を写真ではなく活字で示した際に分からなくても、デザインの写真を直接提示した途端言い当てた事例も多かったことから、文字情報というよりかは商品認識の記号的存在あるいは演出戦略としての意味合いを帯び始めているようである。いずれせよ、消費者を主な対象とした当研究の限りでは、かつて支配層の文字であった漢字は現代日本のように漢字・ハングル混用が一般的だった時代を経て、今や記号・ファッション要素・デザイン要素あるいは演出効果の担い手としての役割を与えられてきている。日常生活の中で (目に見える形で) 使用される機会が減少したり、文字情報としての役割を担わなくなったからといって、「韓国社会から漢字が消えていく・・・」と見る「消滅の語り」は必ずしも妥当ではないだろう。むしろ、消費者らの認識から垣間見えたのは、記号・ファッション要素・デザイン要素 あるいは演出効果の担い手として漢字表記が新たな役割を果たしつつある姿であった。

「伝統文化」とは現代から隔絶された不変の硬直物ではなく、変化しながら存在し続ける動態まで含めて「伝統文化」の実像なのではないだろうか。新たな形での漢字表記の活用は、かつてほど漢字表記が当たり前でなくなったからこそ可能になったものでもあるだろう。この文脈でとらえると、韓国における漢字表記もその同じ文脈の上で理解できるのではないか。先行研究や文献調査に基づく知見では、「形を変えつつ新たな文脈で活用される漢字表記」という観点が欠如していた。未だ漢字が一般的に日常使われる日本では、「漢字表記」をすることにそれほどの意味や意図は与えられてない。デザインにおいて漢字表記を盛り込むことが大きなインパクトを持つこと自体、韓国における漢字表記の位置づ

けの変化を物語っている。漢字表記が現代韓国社会において「減少はしたが部分的に残り続ける」現実を動的に描く機転は文化人類学ならではの研究態度ではないだろうか。

6. 当研究の限界点と展望を添えて

言語政策という文脈からの分析では拾えていなかった漢字に関する「語り」を人々の実際の声に即して描き出す点に当研究の新規性があるが、そこには常に限界も伴う。主に代表性の欠如、つまりこのフィールドワーク結果を通して「現代韓国の人々は〇〇だ」と一般化して言えないことや、回答者の偏りが伴うことは自覚しなければいけない。そもそも「漢字に関する意識調査」への協力を呼び掛けた以上、漢字に興味がある人々が集まりやすいという限界も伴った。また、今回は志願制で調査協力者を募ったので、文化資本的なバックグラウンドや学歴の偏りをあまり調整できなかった。その点で、この調査研究を通して韓国の人々全体の意識を語り切ることはできない。一方的に断言もできないし、すべきでもないだろう。

このように、当研究には限界があるが、それを自覚した上で、人々の「実際の声」「実際の姿」という視点を補うことで言語政策への着目に終始していた先行研究では見落とされていた人々の多様かつ多角的な考え方を拾い上げ、その存在を示すことができたと思う。

第3節では韓国の言語政策やその下にある教育指針において「ハングル専用・漢字表記不使用」の方向付けがされてきたことを改めて確認した。その内容を踏まえて現場に赴きフィールドワークを実施した結果、言語政策や教育指針における「漢字の他者化」ベクトルだけでは説明しきれない人々の語りを拾い上げ、韓国における漢字という文化要素の社会的役割や位置づけ、人々の接し方に関して新しい視点を得ることができた。その知見を主要な3項目に分けて再整理したい。第一に、子ども・若者の漢字に対する意識や親近感が、両親などの漢字に対する態度や文化資本の影響を受けながら、私教育領域において世代間再生産されている可能性である。公教育に携わる教師の中にも現代韓国社会で漢字を学ぶことの意義を支持する立場は垣間見られたが、だとしても教育カリキュラムという建付けの中でその想いは十分に成就できていないように見受けられる。第二に、漢字という文化要素が若者の意識の中で必ずしも他者化されておらず、漢字（表記）を知ることの必要性が一定程度認識されているという見通しである。一般書を含めて流布されていた「韓国は漢字を廃止した」という単純化言説に一石を投じる見通しであり、警鐘でもあると考える。言語政策や教育の領域で「ハングル専用」の方向付けが強固になっていたからといって、その文脈だけで韓国の人々の漢字に対する付き合い方や接し方を説明しきることはできない。人々の「実際の声」「実際の姿」が先行研究の補填と超克に貢献したと言える。第三に、漢字表記が記号化・ファッション化・デザイン要素化を遂げ役割を変えつつ、新しい文脈の中で現代的応用・消費されている萌芽も明らかにできた。たしかに、現代韓国においてはかつてのように純粋な文字情報として漢字が意味伝達機能を果たすことは減ったのかもしれない。しかし、だからといって「韓国は漢字と無縁だ」などと切り捨ててしまうのではなく、新たな応用例と模索から漢字の「役割変化」を見出し、前向きに記述する「生成の語り」こそ求められているのではないか。今この瞬間も、環境変化に曝されつつ、韓国における漢字という文化要素の役割や社会的位置づけは変化しているのだ。

今回の研究調査では、読解力・文解力の維持および強化、ならびに「語彙力低下」への処方箋として漢字（表記）を知る重要性を訴求する語りが印象的であった反面、同時にそれはかつてのような「漢字表記が溢れる韓国社会」への回帰を希求するものではなかった。こうした「賛成か反対か」「肯定か否

定か」という二項対立で捉えきれない漢字への想いの実相を引き続き明らかにすることが当面の課題として残っている。インフォーマントの拡充や偏り解消、参与観察の導入など方法を創意工夫しながら、メディア空間における漢字関連言説、漢字の利活用をめぐる「伝統と挑戦」の模索と相克なども射程に含めつつ、現代韓国社会を生きる人々と漢字との接触について検討を加え続けていきたい。

付記

この論文は、2023 年度提出の修士論文に向けて実行した現地調査の結果分析を援用し、それをたたき台に抜粋と考察の追加・再整理を施したものである。

注

- 1) その点に注目すれば日本も韓国も同じ漢字文化圏に属する「漢字文化の担い手」であり、この視座から見限り互いは隔てられた他者ではなくなるだろう。
- 2) 半世紀の間で、漢字表記が激減した。一方、現代でも部分的にはあるが漢字表記は織り交ぜられていることがわかる。
- 3) 若者らの漢字に対する語りや想いのありようを知ることは、漢字文化圏としての韓国の将来展望に資するのではないか。
- 4) ボブズボウム、エリック／レンジャー、テレンス『創られた伝統』紀伊国屋書店、1992 年。
- 5) 「韓国における言語政策」に限定せず、「韓国に漢字はもう無い、廃止した」と言い切ってしまう論調が一般書にも多い。しかし、大前提として必要な「漢字表記」と「漢字語彙使用」の論じ分けがなされていない場合が多い。「漢字語彙使用」を完全に無くすことは不可能なので、議論の対象は「漢字表記」に範囲を限定すべきだろうが、その分別が無いまま「韓国は漢字を廃止した」と単純化言説でミスリードをしている。一般書を含めて、韓国における漢字に対する文献は「韓国は漢字を捨てた」といった単純化言説があまりにも多い。後続研究でも指弾されるべきだろうが、「(語彙ではなく)表記としての漢字使用」に限定することなく、安易に「韓国は漢字を使わない」と吹聴する語り草は問題視されるべきではないか。重ねて、形を変えつつも漢字表記が社会の中に残り続ける動態も無視している(豊田有恒『韓国が漢字を復活できない理由』祥伝社、2012 年 呉善花『漢字廃止で韓国に何が起きたか』PHP 研究所、2015 年など)。
- 6) 生越直樹「朝鮮語と漢字」『漢字圏の近代——ことばと国家』東京大学出版会、2005 年。
- 7) 宋永彬「韓国の漢字」『朝倉漢字講座 5 漢字の未来』朝倉書店、2004 年、143 頁。
- 8) 宋永彬「韓国の漢字」『朝倉漢字講座 5 漢字の未来』朝倉書店、2004 年、139 頁。
- 9) 宋永彬「韓国の漢字」『朝倉漢字講座 5 漢字の未来』朝倉書店、2004 年、130 頁。
- 10) 宋永彬「韓国の漢字」『朝倉漢字講座 5 漢字の未来』朝倉書店、2004 年、130 頁。
- 11) 李善英「韓国における漢字廃止政策—李承晩政権期を中心に—」『立命館国際研究』30 巻 2 号、2017 年、118 頁。
- 12) ハングルが登場するまで朝鮮半島における文字は漢字のみだったが、漢字漢文はあくまで表意文字であるため現実世界で使われている言語をその通り書き表すことには困難が伴ったという。人名や地名といった固有名詞を書き表す際に漢字の「音」を援用してあてがったり、「訓」を援用する借字表記が試みられたこともあった。さらに、漢字を用いながらも語順を現実の話し言葉に一致させる「誓記体表記」や、本来漢字表記できない助詞や語尾を「音」に近い漢字で表現する「吏読」が考案されたこともあった。このように今で言うところの「言文一致」のような取り組みも含めて、漢字だけで言語を表記し運用するという時代がしばらく続いたのである。
- 13) 文楚雄／伊藤隆司／盧載玉「日中韓三か国における漢字教育の現状と課題」『立命館産業社会論集』第 51 巻 4 号、2016 年、26 頁。
- 14) 平香織「韓国における漢字使用に関する調査報告」『南島文化』28 巻、2006 年、172 頁。
- 15) そもそも、「偉大な文字」という意味である「ハングル (한글)」という呼称を名付けたのも彼であり、19 世紀末からのハングル地位向上に大きな役割を果たした学者であった。
- 16) 1975 年新学期からは、教科書の漢字表記記載自体は再び許可されたが、漢字そのものを「漢文」科目以外で教

えることはなかった。漢字漢文そのものを教えることと、どの科目にせよ教科書に漢字表記を織り交ぜることは別問題である。「漢文」以外の科目の教科書に漢字表記を併用することに関しては、漢字教育実施そのものをめぐる議論とは別に論争があるようだ。さしあたり当研究では別問題として考えている。

- 17) 稲葉継雄「『解放』後韓国における「ハングル専用論」の展開——米軍政期を中心に」『文藝言語研究. 言語篇 8』1983年, 62頁。
- 18) 李善英『朝鮮半島における言語政策の展開——1910～1979 消滅言語の危機を乗り越えハングル専用化へ』創土社, 2020年, 104頁。
- 19) 日本の教育課程に例えるのであれば、「総合的な学習の時間」である。ただ、この裁量時間内に必ず漢字学習を取り上げなければいけないという訳でもなく、その時間を英会話やコンピューター学習に充てる場合もあるので、初等教育において漢字に触れることなく終わる児童も多いようだ。この時間で漢字漢文を取り扱うとしても、漢字という科目が教科として存在しているわけではないので、教科書は無く、各自治体や各学校、各教員の作成した教材で行う場合が多いようだ。국가교육과정정보센터（国家教育課程情報センター）HP：<https://ncic.re.kr/mobile.kri.org4.inventoryList.do?sessionId=51C1B81D48D6FC97ABAB042DCC50BBE5> も参照のこと。（最終閲覧 2024年11月29日）
- 20) 韓国教育課程評価院「2024 学年度大学修学能力試験採点結果報道資料：<https://eiec.kdi.re.kr/policy/callDownload.do?num=245700&filenum=1&dtime=20231207171429>（最終閲覧 2024年1月9日）を参照。
- 21) 数は減らしたものの、部分的漢字表記が今も残存している。
- 22) 宋永彬「韓国の漢字」『朝倉漢字講座 5 漢字の未来』朝倉書店, 2004年, 147頁。
- 23) 「政府公文書—道路標示版 漢字を一緒に書く」『朝鮮日報（조선일보）』1999年2月10日, 1面。
- 24) 上述の「語り 13」で言及されたような「自分の名前の漢字の由来を調べて来る」という課題は、他の調査協力者との対話の中でも度々言及された。漢字教育の現場における定番の宿題だと思われる。
- 25) 調査協力者が各事例を「デザインに盛り込まれた漢字表記」ではなく、瓶の形や色遣いで認識している可能性も排除できない。この点には留意しなければならない。もはやデザインの中の漢字表記を文字として見たり読んだりしていない場合も多いのではないか。

引用文献

（日本語）

- 赤坂憲雄『東西／南北考——いくつもの日本へ』岩波書店, 2000年。
- 網野善彦『日本の歴史 00 「日本」とは何か』講談社, 2008年。
- 綾部恒雄『文化人類学 最新術語 100』弘文堂, 2002年。
- アンダーソン, ベネディクト（訳：白石さや, 白石隆）『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』図書新聞, 2007年。
- 李光鎬「領土」としてのメディア——ディアスポラの母国メディア利用（慶應義塾大学三田哲学会叢書 ars incognita）慶應義塾大学出版会, 2016年。
- 李津娥／李光鎬『クリティカル・オーディエンス——メディア批判の社会心理学』新曜社, 2023年。
- 李善英「韓国における漢字廃止政策——李承晩政権期を中心に」『立命館国際研究』30巻2号, 117-143頁, 2017年。
- 李善英『朝鮮半島における言語政策の展開——1910～1979 消滅言語の危機を乗り越えハングル専用化へ』創土社, 2020年。
- 稲葉継雄「『解放』後韓国における「ハングル専用論」の展開——米軍政期を中心に」『文藝言語研究. 言語篇 8』61-88頁, 1983年。
- 井之口有一『明治以後の漢字政策』日本学術振興会, 1982年。
- 今井久美雄『울인원韓國語〈漢字音・漢字語〉ハンドブック』インターブックス, 2019年。
- 今井久美雄『古狸案先生の韓国語「中級」教室』三修社, 2004年。
- 李翊埏／李相億／蔡琬（訳：前田真彦）『韓国語概説』大修館書店, 2004年。
- 大石直正／高良倉吉／高橋公明『日本の歴史 14 周縁から見た中世日本』講談社, 2009年。
- 生越直樹『朝鮮語と漢字』『漢字圏の近代——ことばと国家』東京大学出版会, 2005年。

- 兼若逸之『韓国語の漢字語マスター 法則が分かれば語彙が増える!』株式会社 HANA, 2017 年。
- 金井雅之／渡邊大輔／小林盾『社会調査の応用——量的調査編』弘文堂, 2012 年。
- 菊池久一『〈識字〉の構造: 思考を抑圧する文字文化』勁草書房, 1995 年。
- 金柄徹『家船の民族誌』東京大学出版会, 2003 年。
- 金文京『漢字を使った文化はどう広がっていたのか——東アジアの漢字漢文文化圏 (東アジア文化講座)』文学通信, 2021 年。
- 金文京『漢文と東アジア——訓読の文化圏』岩波書店, 2010 年。
- クリフォード, ジェイムズ (訳: 太田好信, 慶田勝彦, 清水展, 浜本満, 古谷嘉章, 星埜守之)『文化の窮状 二十世紀の民族誌, 文学, 芸術』人文書院, 2003 年。
- ゲルナー, アーネスト (監訳: 加藤節)『民族とナショナリズム』岩波書店, 2000 年。
- 佐藤郁哉『フィールドワーク 増訂版 書を持って街へ出よう』新曜社, 2021 年。
- 佐藤郁哉『フィールドワークの技法——問いを育てる, 仮説をきたえる』新曜社, 2002 年。
- 申登植 (訳: 金順姫)『韓国史入門 梨花女子大学コリア文化叢書』東方出版, 2009 年。
- 宋永彬『韓国の漢字』『朝倉漢字講座 5 漢字の未来』朝倉書店, 2004 年。
- 平香織『韓国における漢字使用に関する調査報告』『南島文化』28 巻, 171-174 頁, 2006 年。
- 池炫周直美／ボイル, エドワード『日本の境界 国家と人びとの相克』北海道大学出版会, 2023 年。
- 丁允英『韓国における漢字・漢文教育の現状について』
- 堀誠『漢字・漢語・漢文の教育と指導』学文社, 201-217 頁, 2011 年。
- 藤堂明保『中国語研究学習双書 3 漢字とその文化圏』光生館, 1988 年。
- 野間秀樹『韓国語教育論講座 第 1 巻』くろしお出版, 2007 年。
- 野間秀樹『韓国語教育論講座 第 2 巻』くろしお出版, 2012 年。
- 野間秀樹『韓国語教育論講座 第 3 巻』くろしお出版, 2018 年。
- 野間秀樹『ハングルの誕生 人間にとって文字とは何か』平凡社, 2021 年。
- バートン, ブルース『日本の「境界」 前近代の国家・民族・文化』青木書店, 2000 年。
- 朴善娟『韓国の漢字教育——韓国の漢字検定試験について』『JSL 漢字学習研究会誌』9 巻, 21-26 頁, 2017 年。
- 藤田結子／北村文『現代エスノグラフィー 新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社, 2022 年。
- 藤原清夫／清水強志／榎本環／大矢根淳『社会調査の基礎』弘文堂, 2010 年。
- ブルデュー, ピエール (訳: 石井洋二郎)『ディスタンクシオン I [社会的判断力批判]』藤原書店, 1990 年。
- ブルデュー, ピエール (訳: 石井洋二郎)『ディスタンクシオン II [社会的判断力批判]』藤原書店, 1990 年。
- 文楚雄・伊藤隆司・盧載玉『日中韓三か国における漢字教育の現状と課題』『立命館産業社会論集第 51 巻 4 号, 13-34 頁, 2016 年。
- ボブズボウム, エリック／レンジャー, テレンス『創られた伝統』紀伊国屋書店, 1992 年。
- 三尾裕子／本田洋『東アジアにおける文化の多中心性』風響社, 2001 年。
- 山下晋司／船曳健夫『文化人類学キーワード 改訂版』有斐閣, 2008 年。
- 山下晋司『文化人類学入門 古典と現代をつなぐ 20 のモデル』弘文堂, 2006 年。
- 渡邊裕子『隣国の言語を学び, 教えるということ——日韓の高校で教える言語教師のライフストーリー』ひつじ書房, 2019 年。

(韓国語)

- 연세대학교 언어정보연구원 『언어순수주의의 발현과 전개』 한국문화사, 2019 年。
- (延世大学校言語情報研究院『言語純粹主義の発現と展開』韓国文化社, 2019 年。)
- 전철용 「초등학교 한자 교육의 현황과 전망」『漢字漢文教育』, 1(23), 25-49, 2009 年。
- (チョン・チョルヨン「初等学校漢字教育の現況と展望」『漢字漢文教育』1 巻 23 号, 25-49 頁, 2009 年。)
- 韓國語文教育研究會『漢字教育과 漢字政策에 대한 研究』 도서출판 역락, 2005 年。
- (韓國語文教育研究會『漢字教育と漢字政策に対する研究』図書出版亦楽, 2005 年。)